

冬の海にて

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

登場人物

榊原隼雄 都内の総合病院の精神科の部長

榊原貞子 隼雄の妻

山本薫 隼雄の娘

山本弘 薫の夫。小学校教師。

山本義也 薫の長男

山本愛美 薫の長女

山本えりや 薫の次女

安藤直之 精神科副部長

渡部秀二 事務局長

及川えり 看護婦

保坂由美子 看護婦

西川伝蔵 患者

< 前編 >

病院の運営会議

榊原 ええっ、精神科のベッド数を50から10に減らせと、そういうことですか、事務局長？

渡部 病院の経営のことを考えれば、やむをえない選択です、安藤先生。精神科は手術がないし検査は少ないし、どうしても外科や脳外科に比べると、収益が上がらない。

榊原 では、今までの努力は、私の30年の努力は無駄だと言うんですか。

渡部 いや、もちろん、部長のお働きには感謝しています。しかしですね、病院も生き残りを考えて、思いきった改革が必要なんです。

榊原 改革？病院はそれでいいかもしれないが、患者はどうなるんです、患者は！今だってベッドが空くことなんてないんですよ、事務局長！

渡部 それはそうですが、赤字を抱えて慈善事業をするわけにはいきませんから。

榊原 もういい。事務局長、最後に一つだけ聞いておきたい。これはもう既に決まったことなのかね。

渡部 残念ながら、そうです。まあ榊原部長には、今後は囑託という形で群馬の方の分院でお手伝いいただいて...

N 私は榊原隼雄。都内の総合病院の精神科の部長をしている。地方の国立大を卒業して念願の精神科医になって以来、臨床一筋に30年近く勤め、自分なりに、社会に貢献してきたとのいささかの誇りも感じていた。そして、定年をまじかに控えた今、50人の患者への最後の治療と、後進のための研究データを残して花道を飾りたいと考えていた矢先、突然、従来5分の1という大幅なベッド数削減が決定したのだ。

榊原モノ 今まで患者のためにとやってきたあげくが、この結果か…。いったい私は何のためにこんなに必死に働いてきたんだ…

神経科外来の診察室

榊原 調子がいいようですから、薬は特に変えないでいきましょう。

西川 へい。

榊原 では、また2週間後。

西川 先生、病院止めるってほんとかい？

榊原 え、話が早いな。やめませんよ、外来は続けますよ。

西川 あー、よかった。榊原先生みたいないい人にやめられたら、俺行くとこなくなるもん。先生いなくちゃ寂しくって、また呑まなくちゃいらんないよ。

榊原 おいおい、西川さん、それは困るよ。

西川 はは、冗談だよ、先生のおかげで酒やめられたんだから。先生さまさまだ。んじゃ、また、頼みます。

榊原 お大事に。

N 中には私を信頼して通院してくれる患者もいる。なのに今後は入院が必要な人も、選択して断っていかねばならないのだ。経営という大義名分のもとに。

精神科病棟のナース・ステーション

えり 榊原先生が突然一週間もお休み取るなんて、びっくりしちゃいましたよ。

由美子 ショックだったのよ。ベッド数減らされて、外来だけでいいって言われたら。

えり ベッド数10床じゃ、副部長の安藤先生で十分ですよ。榊原先生、群馬の分院に行く話もあるそうじゃないですか。左遷でしょ、それ。

由美子　　今までやってきたことを、否定された気になるわよね。
えり　　大丈夫でしょうか、榊原先生。
由美子　　え、何が。
えり　　突然、生きてるのがいやになっちゃったりしたら…。
由美子　　やだ、考えすぎよ。
えり　　わかんないですよ。先生、仕事の虫だったから。
渡部　　おい、くだらない噂をするんじゃないぞ。
えり　　事務長、いらっしゃったんですか。
渡部　　部長はお疲れなんだ。しばらく休んで、また新たな気持ちで出なおされるんだろ
う。
由美子　　そうね。本当に、ゆっくり休養できるといいけど…

N　　そんな看護婦たちの噂話をよそに、私は重い気持ちで家に帰った。彼女たちの話
の通り、翌日から一週間、休むつもりだった。何をするというのではない。ただ、何
もかも投げ出したかったのだ。

榊原の自宅の居間

貞子　　あなた、お茶が入りました。
榊原　　ありがとう。
貞子　　明日から旅行って、どちらに？
榊原　　いや、まだ決めてない。
貞子　　のんきですね。
榊原　　温泉にでもつかって、昼寝でもしてくるよ。
貞子　　あなた、くやしくないんですか？病院の事務局の方たちの言われるまま、4月から
群馬の分院行きだなんて、ひどすぎますよ。
榊原　　仕方ないさ。
貞子　　だから、大学に残って下さればよかったんです。教授と意見が合わなかったくらい
で大学お辞めになって。大学にいれば、もうとっくに医学部長ですよ。
榊原　　過ぎたことだ。
貞子　　本だって何冊もお書きになってるし、医学界では知られてないわけじゃないのに。
榊原　　貞子、もうよせ。
貞子　　このままじゃ、わたしの実家にだって恥ずかしくて。
榊原　　(怒鳴りつけて)よせと言ってるだろう。
- 榊原、ドアを開けて出て行く

書斎

- 静かに音楽が流れている。

N 気持ちを静めようと、書斎に戻って音楽を聞いたがちっとも心は晴れなかった。傷心の夫を少しもいたわろうとしない妻の貞子に腹が立った。だがしかし、貞子の言葉ひとつひとつが、そのまま自分の気持ちでもあるような気がした。そのとき本棚にある一冊の分厚い本が目止まった。

榊原 聖書か…

N それは一人娘の薫が、結婚するときに残したものだ。

榊原 そういや、しばらく連絡していないな…。

N 私は少しホコリのかぶっているその聖書を取り出すと、パラパラとめくり、適当なページを読んでみた。

榊原 「空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になるう。」…

N 驚いた。聖書にこんな虚無の言葉が書かれているとは。ふいに、15年前のあの日の薫を思い出した。薫は、結婚の赦しを乞いに私達のところに来ていた。私達夫婦は、薫の将来のために医者か大学教授の息子との縁談を考えていたが、大学時代にクリスチャンになった薫は、卒業と同時に、やはりクリスチャンで小学校教師をしていた山本弘と結婚すると言い出したのだった。

回想

薫 お父さん、本当に大事なものって、そんなになんかと思うの。私、弘さんと結婚して、神様に仕える一生をおくりたいの。後悔したくないの、わかって、お父さん。

榊原 薫、本当にその人でいいのか。私はね、社会的な地位や経済力を求めることも、人生には必要だと思っているよ。それがあってこそ、人は十分に自分の力を発揮できるんじゃないのか？

薫 心配しないで、お父さん。神様が守って下さるから大丈夫。

N 薫が選んだ相手、山本弘は、財産も社会的な後ろ盾もない、頼りなげな青年だった。彼の故郷、北陸の金沢で所帯を構えた薫は、じきに三人の子供の親となり、生活も厳しかっただろうに、一度も私達に金銭的な援助を求めて来なかった。

榊原モノ どうしているだろう、薫は。

N 私は、10年も会っていない娘のことを思った…。すると、無性に娘や3人の孫たちに会いたくなった。

電車内

N 翌日私は、都会の喧騒を離れ、日本海沿岸を走る特急電車で、薫のいる北陸、金沢に向かっていた。

榊原 ほう…。

N 初めて見る日本海は、深い藍色の海だった。晴れてはいたが、冬の凍てつく空気に海はあっさり凛として美しかった。それは、今までの私の日常とはあまりにもかけ離れた景色だった。鳴り響くポケットベル、消毒薬の匂い、カルテや白衣、妻の貞子までもが、どこか遠い世界のように思われた。

榊原モノ 日の下で、どんなに労苦をしても、それが何の益になろう。

N 私は、昨日目にした聖書の言葉をふと思い起こしていた。

- 特急の音、遠ざかりながらF / D

< 後編 >

金沢駅

- 電車、金沢駅のホームに滑りこむ

薫 お父さん！

榊原 薫。

薫 お父さんお元気そう。

榊原 お前こそ。なんだ、少し太ったな。
薫 いやだ、3人の子持ちですもの。もう、オバサンよ。
榊原 はは。
薫 お母さんから電話あったの。心配してたわ、お父さんのこと。
榊原 そうか。
薫 病院の方、大変だったわね。
榊原 このご時世だ。いろいろあるさ。
薫 ゆっくりできるんでしょう。
榊原 まあな。2、3日やっかいになるよ。
薫 子供たち、喜ぶわ。あ、これうちの車。どうぞ乗って。
榊原 ワゴン車か。こんな大きいの、お前が運転するのか。
薫 5人家族ですもの。これくらいじゃないとね。さあどうぞ。

- 車発車する

N 私は榊原隼雄。都内の総合病院の精神科の部長をしている。臨床一筋に30年近く勤め、定年をまじかに控えて最後の花道を飾ろうとしていた矢先、病院の経営難から精神科のベッド数削減が決定した。私は気持ちの整理をつけようと一週間の休みを取り、娘のいるここ金沢にやってきたのだった。

薫の家

- ダイニングキッチンに家族が集まっている

弘 ...日ごとの糧を感謝します。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。
アーメン。
皆 アーメン。
薫 さあどうぞ。お父さん、遠慮なく食べて。お鍋の一品料理だけど、量はありますから。
義也 この肉もーらい。
愛美 アー、ずるーい。
えりや お兄ちゃん、お祈りの時、目開けてたんだ。だからお肉の場所わかってたんだ。
義也 ちゃんと、目はつぶってましたあ。
愛美 もう、お母さん、お肉おんなじ数にわけてよー。
薫 なんです、あんたたち、おじいちゃんの前でお行儀悪い。お母さん、恥ずかしいわよ。

N 子供たちに囲まれた薫は、昔とは見違えるようだった。ピアノを弾いていたか細い

腕が、ワゴン車のハンドルを握り締め、大きな鍋を持ち上げるたくましい母親の腕になっていた。少女時代よく何かを愁えているような表情をしていた薫が、生き活きと頬を紅く染めて家族のために働いている姿を見るのは楽しかった。

弘 騒がしくてすみません。

榊原 いや、大人数の食事もいいもんだ。

弘 明日は、どちらに行かれるんです？

榊原 特に、決めてないんだが。能登の方に行こうと思ってね。

弘 ぜひ能登金剛を見てきてください。僕がご案内しましょうか？

榊原 いや、一人の方が気楽でいいよ。

薫 明日は午後から雪が降るって、早く帰って来て下さいね。お父さん。

N 翌日、私は金沢から輪島行きバスに乗った。藍色の日本海を左に見ながら、バスはのろのろと能登半島を北上して行った。バスには客はいなくて、時折、ほっかむりをして干物を包んだ風呂敷をしょった老婆が乗りこんでくるだけだった。海辺の民家の屋根はたいがい黒瓦だ。それが冬の弱い日差しを浴びてかすかに光っていた。

- ふきつける潮風。波の砕け散る音

N バスを降りた途端、冷たい潮風に私は思わずよろけた。

榊原モノ これが海だ。自然というものなんだ。

N 波が次々と押し寄せて、奇岩にぶち当たって砕け散っている。それは何百年も何千年も飽くことなく繰り返されてきたのだ…。

榊原モノ なんと力づよい光景だろうか…。それに比べて私は、この私はなんて小さな存在なんだろうか…。

N 患者のため地域のため、精一杯働いたはずの私、引退しても社会的な地位も名誉も約束されていたはずのこの私が、経営のため当の病院に捨てられようとしている。何十年も連れ添った妻も私に失望を隠そうとしない。私は足元に注意しながら、ゆっくりと岩場を降りていった。斜めに枝を差し伸べている赤松につかまって覗きこむと、海の底が透けて見えるような気がした。

榊原モノ あの影は魚だろうか？あ、動いた。

N 波が打ち寄せ、砕け散り、波が打ち寄せ、また砕け散り…。

回想

- 海鳴りをバックに

安藤 では私の30年の努力は？

貞子 大学に残っていれば、もうとくに医学部長ですよ。

榊原 私はね、社会的な地位や経済力を求めることも、人生には必要だと思っているよ。

渡部 病院の経営のことを考えればやむを得ない選択です。

貞子 このままじゃ、私の実家に恥ずかしくて。

榊原モノ これが私の一生なのか？みじめな敗北者、これが私なのか…？

- ド、ド、ドーン

榊原 あっ。

- ボキッと松の枝が折れ足を滑らす。一緒に岩も転がり落ち、海に落ちる。

榊原 はあ、はあ(息を切らしている。)

- 波ひときわ大きく

N 死ぬつもりはなかった。だがいつのまにか海に吸い込まれるように、私は身を乗り出していたのだ。身体の重みで松の枝が折れ私は足を滑らせたが、かろうじて岩壁に引っかかって一命を取りとめたのだった。

- 波、波の音。低く高く

弘 (鋭く)お父さんっ。

N 振り仰ぐと岩場の上に、血の気のうせた顔をした婿の弘が立っていた。彼に助けられ、私はやっとの思いで岩を登ると寒さと恐ろしさでその場にくず折れてしまった。

弘 大丈夫ですか、さ、これを飲んで。

N 弘が差し出したのは、砂糖のたっぷり入った熱い紅茶だった。私は飢えた子供のようにそれを飲み干した。いつのまにか雪になっていた。

弘 薫が帰りがおそいって言うんで、心配してきてみたんですが。大丈夫ですか？

榊原 ...日の下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になろう...

弘 あ...聖書ですね、伝道者の書...

榊原 この言葉がね、実感としてわかるような気がするよ。

弘 ...お父さん。

榊原 空しいものだね。人生なんて...

N 一瞬弘は、まじまじと私の顔を見つめた。娘から聞いて事情を知っていたのだろう。その目は今の私には何とも言えず優しくかった。

弘 お父さん、同じ伝道者の書にこんな言葉もあるんですよ。「実に、神から離れて、だれが食べ、だれが楽しむことができようか」。神様と一緒にいるときにだけ、本当の喜びがあります。生きる意味があります。それはお金や名誉等の人間が一般に望むものとは違うかもしれませんが...

榊原 神か...。たしかに私などより、神を信じている君たち家族の方がずっと楽しそうだ。薫なんぞ、じつに生き活きとしている。...弘君。

弘 はい。

榊原 君に礼をいわなければな。薫を幸せにしてくれて。

弘 礼だなんて。ただ神様のお恵みです。

榊原 そうか。

N 私はその時初めて、人は何か目に見えない大きな存在に行かされているのだと思った。私だって、さっきその方が止めてくれなければ、もうこの世にはいなかったのだ。 - 気がつくと、何事もなかったように海がうねっている。灰色の厚い雲に覆われた空から、その海一面に雪が降っていた。

榊原 この海を見ていると、神がいるような気がするね。

弘 そうです。神様は確かにおられますよ。お父さん。

N 天を覆い尽くした無数の白い結晶は、後から後から舞い降りて、灰色にうねる海の中に吸い込まれて行く。私は、しばし息をのんでその光景に見とれていた。

- 波の音、高く低く

弘 あ、そうだった。薫が金沢名物の治部煮を食べてもらうんだって張りきってたんだ。

榊原 あいつが作るのか？変なもの食わさんで欲しいな。こっちは年寄りだし、治部煮が泣くぞ。

弘 はは、いや、あれでなかなか料理上手なんですよ。さあ、早く帰りましょう。

N 立ち去りがたい思いで、私はもう一度海を振り返った。来年の今ごろ、私はどうしているのだろう。まだ今の病院にいるのか、それとも群馬の分院で働いているのだろうか。だが、もう空しい気持ちで生きていたくない。残された人生を本当に意味のあるものにしたい。

榊原モノ 答えはあの、聖書にあるのだろうか…。きっとそうだ。東京に帰ったら、聖書を読んでもみよう。

弘 さあ、お父さん。

N そのとき私は心に決めていた。

榊原モノ 来年の今ごろ、またこの冬の海を見に来よう。

N 海鳴りが一段と強くなった。私は冷たい空気を深々と吸い込んだ。この冬の海との出会いが、私を変えてくれることを予感しながら。

- 波ひときわ大きく

< 完 >